

優秀賞

母の明るい笑顔に乾杯

山梨県 桂高等学校二年 長田 大昌

今日も明るく元気な母の声が、真夏の庭にこだまする。笑顔いっぱい、我が家の元気印である。当たり前のような母の温もりが今日もそこにはある。命輝く母の姿がある。私の顔にもふと笑みがこぼれる。そして、あの日の感動が、また再び甦る。

平成十四年六月の末、母は下腹部に今も大きな傷跡の残る手術を受けた。病名『卵巣嚢腫及び茎捻転』であった。数年前より右下腹部に引きつるような痛みを感じていたという母の緊急手術。母のあまりの苦しみ様に、中二の私にも一刻を争う事態である事は容易に理解できた。

手術の翌日、病室を見舞った私のほほを涙が流れた。姉の目にも涙があふれていた。そこには、いつもの母とは掛け離れた病人の姿があった。体にいくつもの管を付けられた母は、私達の顔を見るなり、精一杯の元気な笑顔で迎えてくれた。母の思いが嬉しかった。母の素晴らしくたくましい命の輝きが嬉しかった。自らの体己の苦しみよりも我が子を思う母の愛情の深さに、声にならない感動の涙が込み上げこぼれ落ちた。

母の手術は、大きないくつものリスクを伴っ

体に激痛が走る。気丈な母は、右腹を抱えながら一人、総合病院の婦人科を受診した。しかし、痛みの原因は分からず、泌尿器科、外科と受診。日毎に痛みは増すばかりである。処方されていた痛み止めは、もつ全く薬の役目を果たしてはいない。昼夜を問わず激痛が母の体を襲つ。身をよじり痛みに堪える母の姿。やっと病名が判明したのは、再度婦人科を受診した時であった。既に最初の受診からは、二カ月以上の月日が経っている。直ちに設備の整った大きな病院での

ていた。手術後、命に関わる血栓症を起こしやすい下肢静脈瘤の持病があること。金属アレルギー体質であること。卵管が二回転半し茎捻転を起こしているため、腸や子宮への癒着が懸念されていたこと。特に心配されていたのが、腫瘍マーカーの値は低かったものの、手術前の主治医の先生からの説明で

「出来ている腫瘍がぶどうの房の様に見えるのが心配です。切って開いてみないと分かりませんが、良性か悪性かは、今の所、五分五分です。」

と宣告されていたことだ。

幸い癒着もなく、良性であったが取った腫瘍の大きさは破裂しよつものなら、命取りになる

程大きく、新生児の頭ぐらゐの腫瘍であつたと聞いている。心配していた通り、金属アレルギーを起こしびらん化、抜糸した傷跡は大きな口を開きただれている。しかし、医師の反対を押しきり、手術後一週間、傷口の開いたままの姿で、母は無理矢理退院し帰宅した。退院して一カ月間、片道一時間をかけて毎日消毒に通うと約束しての強引な帰宅であつた。そこには母の愛情の深さと気丈さ、母の命のたくましさが見えて見える。

しばらくして、五分五分と命の宣告された時の印象を尋ねてみた。母は

「少しも怖くなど無かつたよ。何しろ早くあなた達の元に帰りたくつて。何が何でも病気に

の傷跡の痛みなど顔にも出さず、明るく大きな声で

「ただいま。お留守番ご苦労様ね。」

と言つた母に、母以上の笑顔と大きな声で、

「おかえり。」
と言つてやりたかつたと少し大人になつた私は今になってそつ思つ。

あれから三年。今も目まいと頭痛を伴つ症状と闘いながら、下肢静脈瘤の硬化治療も受けている母。相変わらずの明るい笑顔。大きくたくましい笑い声が今日も我が家にこだまする。

「お母さん、太陽の様に燦燦と降り注ぐ明るい笑顔と深く温かい愛情をいつもありがとう。」

勝つんだとそれしか考えていなかったから。私つて案外心臓に毛が生えていたのね。」

と。その言葉を聞いた瞬間母の気丈さに脱帽し、私は思わず苦笑してしまつた。自らの病の重さを感じているのかいないのか、あまりにあっけらかんと他人事みたいに笑顔で話す母が、とても愛おしくかわいく思えたからだ。

母が入院していたのは、たった八日間だけだつた。しかし、父も姉も私もそして、愛犬コロにとつても、そのたった八日間がとつともなく長い時であつたように思つた。電気をつけた部屋の中がなぜか暗く、むし暑い季節だといつのになぜか寒々しい。日々当たり前のように家の中にいた母。退院してきた日、口の開いたまま

あの日流した感涙。たくましい母の命の輝きに乾杯。

